

付 録 1 名 簿

〔昭和27年度漢字学習指導研究会〕準備調査

委員長	久保田藤麿	文部省調査普及局長
委員	熊沢龍	東京教育大学教授
〃	倉沢栄吉	東京都指導主事
〃	小椿誠一	東京都目黒区立原町小学校長
〃	小塚芳夫	東京都澁谷区大向小学校教諭
〃	篠原利逸	文部省初等中等教育局初等教育課事務官
〃	島津一夫	国立教育研究所員
〃	富山民蔵	文部省初等中等教育局中等教育課事務官
〃	原敏夫	文部省調査普及局国語課長（9月まで）
〃	白石大二	〃（10月から）
〃	平井昌夫	国立国語研究所員
〃	松延市次	東京都江東区立亀戸中学校教諭
〃	村尾力	国立国語研究所員
〃	山田勝美	駒込高等学校教諭
〃	渡辺茂	東京都立白鷗高等学校教諭
主任	塩田紀和	文部省調査普及局国語課事務官

〔昭和28年度漢字学習指導研究会〕本調査

委員長	久保田藤麿	文部省調査局長
〃	小林行雄	〃（8月28日から）
委員	木藤才蔵	文部省初等中等教育局初等教育課事務官
〃	熊沢龍	東京教育大学教授
〃	倉沢栄吉	東京都指導主事

〃	興 水	実	国立国語研究所員
〃	小 椿	誠 一	東京都目黒区立原町小学校長
〃	小 塚	芳 夫	東京都澁谷区立大向小学校教諭
〃	佐 藤	卯 吉	東京学芸大学付属豊島小学校長
〃	島 津	一 夫	国立教育研究所員
〃	白 石	大 二	文部省調査局国語課長
〃	富 山	民 蔵	文部省初等中等教育局中等教育課事務官
〃	中 川	武 夫	東京学芸大学付属竹早小学校長
主任	塩 田	紀 和	文部省調査局国語課事務官
副	加 藤	彰 彦	文部省調査局国語課

〔昭和27年度実験学級担任〕

1年	佐 藤	徳 則	北区立滝野川小学校
	岡 安	佐 知子	西多摩郡瑞穂町立瑞穂第1小学校
2年	入 山	和 香子	荒川区立真土小学校
	阿 保	年 一	南多摩郡忠生村立忠生小学校
3年	藤 本	一 郎	中央区立京橋小学校
	岡	英 雄	江東区立第2大島小学校
4年	目 賀	田 八郎	新宿区立牛込仲之小学校
	加 藤	倉 栄知	大田区立調布第3小学校
5年	野 口	玲 子	武蔵野市立武蔵野第3小学校
	亀 田	宏	西多摩郡福生町福生第2小学校
6年	益 永	篤	千代田区立九段小学校
	中 沢	重 修	足立区立千寿第8小学校

〔昭和28年度実験学校長および学級担任〕

	(学校長)	(担任)
茨城県水戸市立浜田小学校	井戸方夫	立原豊子(3年)

- // 稻敷郡牛久村立牛久小学校 寺田迪雄・野本エイ(3年)
- // 多賀郡磯原町立明德小学校 鈴木八衛(鈴木郁男(4年)
小室富士子(10月か)
ら)
- // 西茨城郡岩瀬町立岩瀬第1小学校
島崎春吉・川那子和子(6年)
- 山梨県北都留郡梁川村立梁川小学校
小坂 式・上条昌子(1年)
- // 東山梨郡山梨村立山梨小学校
竹内弥三郎・組谷春江(2年)
- // 東八代郡祝村立祝小学校 野原正己・武藤亮治(6年)
- // 甲府市立千塚小学校 吉岡忠喜・西尾和子(5年)
- 愛知県刈谷市立小高原小学校 神谷 茂・服部 操(1年)
- // 半田市立亀崎小学校 杉浦与七・伊藤真一(2年)
- // 宝飯郡蒲郡町立蒲郡東部小学校
石川一夫・野田 豊(4年)
- // 岡崎市立井田小学校 岩月清一・永田 績(5年)
- 東京都目黒区立原町小学校 小橋誠一・鳴海京子(3年)
- // // // 窪木寅吉(2年)
- // 澁谷区立大向小学校 森 宗男・小塚芳夫(6年)
- 東京学芸大学付属豊島小学校 佐藤卯吉・柴田秀雄(1年)
- // // // 相原永一(5年)
- // 竹早小学校 中川武夫・高木正三(4年)

〔昭和28年度各県協力指導主事〕

茨城県教育委員会事務局指導課

伊藤暢彦

山梨県教育庁指導部学校教育課

岩波民造

愛知県教育委員会事務局指導部学校教育課

嶺 光雄

付 録 2 漢字学習指導の実験調査（要項）

昭和 28 年 4 月

1 目 的

この調査は、漢字学習の指導基準ならびに、漢字の学年別配当案を作る資料を求めるために行うものである。

2 方 法

この調査のために、文部省は、小学校の各学年について若干の実験学級を設ける。また、調査法の研究のために、調査局内に「漢字学習指導研究会」をおく。この調査についての事務は、調査局国語課で行う。

3 実施期間

少なくとも今後 2 か年継続して行う。実験学級は年度ごとに代るものとする。

4 学習指導

実験学級の担当教師は、文部省で作った「学年別漢字配当試案」を学習指導に適用する。ただし、このために特に宿題や課外作業を児童に課したり、あるいは学級の学習指導全体を著しく特異なものにしたりしないようにする。

5 報 告

担当教師は、年間およそ次のような報告書を文部省に提出する。

- | | | |
|-----------------|-------|---------|
| (ア) 既習・未習の漢字表 | } |事前 |
| (イ) 月別漢字提出予定表 | | |
| (ウ) 漢字学習指導記録簿 | | 毎月 |
| (エ) 実験指導についての反省 | | 事後 |

(オ) その他

6 テ ス ト

担当教師は，文部省の指示に従って，事前テストおよび終末テストを行う。また，指導の段階ごとにテストを行う。

テストの報告は，前項の報告とは別に行う。

(以上)

29	高	た	か	い	58	雪	ゆ	ぎ	88	麦	む	ぎ	4	意	イ
30	合	あ	う	う	59	千	セ	ン	89	半	ハ	ン	5	引	ひ
31	谷	た	に	に	60	前	ま	え	90	百	ヒ	タ	6	運	ウ
32	国	た	に	に	61	組	く	む	91	父	チ	チ	7	駅	ハ
33	黒	く	ろ	い	62	早	は	い	92	風	カ	セ	8	円	エ
34	今	い	ま	ま	63	走	は	る	93	分	フ	ン	9	遠	エ
35	作	サ	く	ろ	64	草	く	ら	94	文	ブ	ン	10	王	オ
36	糸	い	も	う	65	村	む	い	95	米	コ	メ	11	横	オ
37	思	お	も	み	66	多	お	こ	96	歩	ア	ク	12	屋	ヤ
38	紙	か	ジ		67	男	お	け	97	母	ハ	ハ	13	荷	ニ
39	字	ジ	チ		68	池	い	し	98	方	ホ	キ	14	歌	ウ
40	地	ジ	チ		69	知	し	け	99	北	ホ	キ	15	芽	タ
41	時	ジ	キ		70	竹	た	し	100	每	マ	マ	16	画	メ
42	車	シ	キ		71	虫	む	ち	101	名	モ	ナ	17	回	ガ
43	秋	あ	キ		72	町	ま	い	102	門	モ	ナ	18	界	イ
44	出	で	ス		73	長	な	り	103	夜	ヨ	ヤ	19	開	ク
45	春	は	ス		74	鳥	と	さ	104	用	ヨ	モ	20	絵	エ
46	所	と	コ		75	朝	あ	ん	105	友	ト	ウ	21	角	ク
47	書	か	コ		76	天	て	さん	106	来	ト	モ	22	寒	ク
48	女	お	ン		77	田	た		107	両	リ	ウ	23	感	ク
49	少	す	ナ		78	土	つ	ち	108	力	カ	ウ	24	岸	ク
50	色	い	コ		79	冬	ふ	ゆ	109	林	カ	ウ	25	岩	ク
51	心	こ	コ		80	東	ひ	し	110	話	ハ	ウ	26	顔	ク
52	森	も	コ		81	道	み	ち					27	記	ク
53	西	に	シ		82	読	よ	む					28	起	ク
54	声	こ	シ		83	南	み	み					29	婦	ク
55	夕	ゆ	シ		84	入	い	る					30	喜	ク
56	石	い	ウ		85	年	な	こ					31	客	ク
57	切	き	シ		86	波	な	み					32	究	ク
					87	馬	う	ま							

33	急	ウグ	62	死	しぬ	91	神	かみ	120	度	ド
34	級	キユウ	63	使	つかう	92	深	ふかい	121	刀	かたな
35	球	キユウ	64	始	はじめる	93	進	すすむ	122	当	トウ
36	去	キヨ	65	始	ゆび	94	親	おや	123	投	なげる
37	魚	ギウヨ	66	指	てら	95	凶	ズ	124	島	しま
38	京	キョウ	67	自	ジ	96	世	セヨ	125	答	コタヘ
39	教	キョウ	68	事	シト	97	星	ほし	126	頭	あたま
40	強	キョウ	69	持	シツ	98	晴	はれ	127	同	おなじ
41	橋	キハシ	70	望	シツ	99	船	セフネ	128	動	ドウ
42	銀	ギン	71	望	シツ	100	送	おく	129	肉	にく
43	苦	ク	72	写	シヤ	101	息	いき	130	配	はい
44	兄	ケイ	73	者	シヤ	102	太	ふと	131	買	かう
45	形	ケイ	74	弱	シヤ	103	待	まち	132	売	う
46	決	ケツ	75	主	シユ	104	台	ダイ	133	発	ハツ
47	研	ケン	76	取	シユ	105	炭	タン	134	畑	はたけ
48	原	ケン	77	首	シユ	106	短	タン	135	坂	さか
49	古	ケン	78	受	シユ	107	茶	チヤ	136	板	イタ
50	庫	ケン	79	拾	シユ	108	着	チヤ	137	番	バン
51	午	ケン	80	終	シユ	109	注	チュウ	138	皮	カ
52	後	ケン	81	集	シユ	110	柱	チュウ	139	美	ミ
53	語	ケン	82	住	シユ	111	昼	チュウ	140	表	ヒョウ
54	工	ケン	83	重	シユ	112	昼	チュウ	141	病	ビョウ
55	黄	ケン	84	助	シユ	113	通	チュウ	142	品	ヒン
56	広	ケン	85	勝	シユ	114	弟	テイ	143	負	フ
57	号	ケン	86	乘	シユ	115	庭	テイ	144	物	モノ
58	根	ケン	87	場	シユ	116	鉄	テツ	145	聞	キク
59	細	ケン	88	食	シユ	117	店	テン	146	平	ヘイ
60	散	ケン	89	申	シユ	118	電	デン	147	別	ベツ
61	市	ケン	90	新	シユ	119	都	ト			

148	返	へかえ	ン	5	位	イ	35	期	キ	63	幸	コ	ウ
149	勉	べ	ン	6	医	イ	36	旗	は た	64	航	コ	ウ
150	妹	いもうと		7	委	イ	37	器	キ	65	候	コ	ウ
151	明	あかるい		8	移	うつる	38	機	キ	66	港	みなと	ク
152	鳴	な	ク	9	育	そだてる	39	拳	キ ヨ	67	告	コ	ク
153	面	メ	ン	10	印	イ	40	共	キ ヨ	68	才	サ	イ
154	毛	け		11	員	イ	41	鏡	キ ヨ	69	祭	ま (まつり)	イ
155	野	ヤ	ク	12	院	イ	42	競	キ ヨ	70	菜	サ	イ
156	役	ヤ	ク	13	飲	の む	43	業	ギ ヨ	71	最	サ	イ
157	由	ユ	ウ	14	有	ユ ウ	44	曲	キ ヨ	72	材	ザ	イ
158	遊	あ (あそび)		15	泳	およぐ	45	局	キ ヨ	73	刷	サ	ツ
159	葉	は		16	英	エ	46	具	グ	74	察	サ	ツ
160	様	さま		17	園	エ	47	君	ク	75	算	サ	ン
161	曜	ヨ	ウ	18	温	オ	48	群	グ	76	残	の	こ
162	落	おちる		19	化	カ	49	係	か (かかり)	77	士	シ	シ
163	楽	がたのしい		20	加	く	50	計	ケ (か)	78	止	と	シ
164	里	り		21	科	カ	51	景	ケ	79	仕	シ	
165	陸	リ	ク	22	貨	カ	52	軽	かるい	80	姉	あ	ね
166	流	ながれる		23	改	カ	53	血	ケ (ち)	81	齒	は	シ
167	旅	たび		24	械	カ	54	結	むすぶ	82	詩	シ	シ
168	礼	レ	イ	25	階	カ	55	建	ケ (た)	83	試	シ	シ
169	列	レ	ツ	26	貝	か	56	泉	ケ	84	次	ジ (つぎ)	キ
170	路	ロ		27	害	ガ	57	言	ゲ (い)	85	式	シ	キ
				28	覺	おぼえる	58	現	あらわれる	86	失	う	し
				29	活	カツ	59	固	かためる	87	社	シ	ヤ
				30	関	カン	60	湖	みずうみ	88	借	シ (かり)	ク
				31	館	カン	61	公	コ	89	守	ま	も
				32	観	カン	62	交	コ	90	種	シ (た)	ユ
				33	願	ね (ねがひ)				91	州	シ	ユ
				34	季	キ							
4 年													
1	愛	ア	イ										
2	案	ア	ン										
3	以		イ										
4	囲	か	こ										

92	習	ウ	120	線	セ	ン	148	定	テ	イ	177	夫	フ
93	週	ウ	121	戦	セ	ン	149	底	テ	イ	178	付	つける
94	順	ン	122	選	セ	ン	150	停	テ	イ	179	部	ブ
95	初	あ	123	全	ゼ	ン	151	的	テ	キ	180	服	フ
96	暑	あ	124	争	ソ	ウ	152	点	テ	ン	181	福	フ
97	昭	シ	125	相	ソ	ウ	153	転	テ	ン	182	粉	こ
98	消	シ	126	速	ソ	ウ	154	伝	テ	ン	183	変	かわ
99	唱	シ	127	族	ゾ	ク	155	徒	ト	ド	184	編	へ
100	商	シ	128	統	つ	く	156	努	ト	ド	185	便	べ
101	章	シ	129	卒	つ	く	157	湯	ゆ	ゆ	186	包	つ
102	照	て	130	孫	ソ	ま	158	登	の	ぼ	187	放	ホ
103	焼	や	131	他	タ	ダ	159	等	ト	ウ	188	法	ホ
104	植	シ	132	打	ラ	ッ	160	燈	ト	ウ	189	報	ホ
105	身	シ	133	体	タ	イ	161	堂	ド	ウ	190	防	ふ
106	信	シ	134	対	タ	イ	162	童	ド	ウ	191	望	ボ
107	真	シ	135	隊	タ	イ	163	働	ド	ウ	192	末	す
108	数	ス	136	第	ダ	イ	164	内	ナ	イ	193	万	マ
109	成	セ	137	代	ダ	イ	165	熱	ネ	ッ	194	味	あ
110	清	セ	138	題	ダ	イ	166	念	ネ	ン	195	民	ミ
111	勢	セ	139	達	ダ	イ	167	農	ノ	ウ	196	無	ム
112	静	シ	140	談	ダ	ン	168	倍	バ	イ	197	命	メ
113	整	シ	141	治	チ	ジ	169	反	ハ	タ	198	綿	わ
114	席	セ	142	置	チ	ク	170	飛	ヒ	ト	199	問	モ
115	積	セ	143	帳	チ	ウ	171	悲	カ	ナ	200	約	ヤ
116	折	セ	144	調	チ	ウ	172	鼻	ハ	ナ	201	油	あ
117	説	セ	145	直	ジ	キ	173	必	ヒ	ナ	202	勇	い
118	節	セ	146	丁	チ	ウ	174	氷	コ	オ	203	予	ヨ
119	銭	セ	147	低	ヒ	ク	175	秒	ビ	ヨ	204	洋	ヨ
							176	不	フ	フ	205	要	ヨ

206	陽	ヨ	ウ	13	河	カ	カ	41	区	ク	70	志	{ シ こころざし	
207	利	リ	リ	14	過	{ カ ぎる	42	極	キヨク	71	師	シ		
208	理	リ	リ	15	価	カ	43	均	キ	72	資	シ		
209	良	リ	ヨウ	16	課	カ	44	句	ク	73	似	に		
210	料	リ	ヨウ	17	快	カ	イ	45	型	か	た	74	識	シ
211	緑	み	どり	18	解	{ カ と	イ	46	敬	{ ケ うやま	イ	75	質	シ
212	輪	{ リ わ	ン	19	各	カ	ク	47	経	{ ケ キヨ	イ	76	舍	シ
213	類	ル	イ	20	格	カ	ク	48	芸	ゲ	イ	77	謝	シ
214	令	レ	イ	21	確	{ カ たし	ク	49	欠	{ ケ か	ツ	78	酒	{ シ さ
215	冷	つ	めたい	22	完	カ	ン	50	件	ケ	ン	79	授	ジ
216	連	つ	れる	23	官	カ	ン	51	健	ケ	ン	80	周	シ
217	練	レ	ン	24	漢	カ	ン	52	駿	ケ	ン	81	修	シ
218	老	ロ	ウ	25	管	{ カ く	ン	53	限	か	ぎる	82	徒	したかう
219	勞	ロ	ウ	26	希	キ	キ	54	護	ゴ	83	宿	{ シ ヤ	
220	和	ワ		27	寄	{ キ よ	キ	55	功	コ	ウ	84	祝	いわう
5 年				28	規	キ	キ	56	厚	あ	つ	85	術	ジュ
1	庄	ア	ツ	29	技	キ	ギ	57	康	コ	ウ	86	準	ジュ
2	因	イ	ン	30	義	ギ	ギ	58	講	コ	ウ	87	序	ジ
3	榮	エ	イ	31	議	ギ	ギ	59	際	コ	サ	88	承	シ
4	永	エ	エ	32	久	{ キ ひ	ウ	60	在	ザ	ザ	89	省	{ シ セ
5	塩	エ	エ	33	求	{ キ る	ウ	61	昨	ザ	ザ	90	賞	シ
6	演	エ	ン	34	宮	み	や	62	殺	ころ	す	91	状	ジ
7	央	オ	ウ	35	救	す	く	63	雜	{ ザ ツ	ツ	92	常	{ ジ ツ
8	往	オ	ウ	36	居	{ キ い	ヨ	64	参	サ	ン	93	情	{ ジ な
9	応	オ	ウ	37	許	ゆ	る	65	産	{ サ ウ	ン	94	織	{ シ お
10	億	オ	ク	38	漁	{ ギ リ	ヨ	66	贊	サ	ン	95	巨	シ
11	恩	オ	ン	39	協	キ	ヨ	67	示	{ シ じ	め	96	性	セ
12	果	カ		40	興	キ	ヨ	68	央	シ	7	97	政	セ
								69	司	シ	7	98	精	セ

99	製	イ	128	討	ウ	156	府	フ	6 年			
100	責	キ	129	統	ウ	157	婦	フ		1	衣	イ
101	接	ツ	130	銅	ウ	158	武	フ		2	易	イ
102	設	ツ	131	導	ウ	159	副	フ		3	胃	イ
103	淺	さい	132	特	ク	160	復	フ		4	異	イ
104	善	ゼ	133	得	ク	161	兵	フ		5	遺	イ
105	然	ン	134	得	ク	162	刃	フ		6	老	イ
106	祖	ソ	135	毒	ク	163	保	フ		7	營	イ
107	倉	ソ	136	任	ン	164	豊	フ		8	衛	イ
108	想	ソ	137	燃	ン	165	牧	フ		9	益	イ
109	造	ソ	138	破	ル	166	滿	フ		10	液	イ
110	像	ソ	139	敗	イ	167	脈	フ		11	延	イ
111	増	ま	140	博	ク	168	務	フ		12	可	イ
112	則	ソ	141	判	ン	169	迷	フ		13	仮	イ
113	側	か	142	飯	ン	170	葉	フ		14	我	イ
114	測	ソ	143	比	ル	171	輪	フ		15	賀	イ
115	尊	ソ	144	肥	ル	172	余	フ		16	革	イ
116	退	ク	145	非	ヒ	173	容	フ		17	拈	イ
117	帶	ク	146	費	ヒ	174	養	フ		18	額	イ
118	態	タ	147	備	ヒ	175	浴	フ		19	株	イ
119	單	タ	148	筆	ツ	176	留	フ		20	刊	イ
120	所	ダ	149	俵	ウ	177	量	フ		21	幹	イ
121	団	ダ	150	票	ウ	178	領	フ		22	勸	イ
122	築	チ	151	評	ウ	179	例	フ		23	價	イ
123	貯	チ	152	標	ウ	180	歴	フ		24	欲	イ
124	張	チ	153	貧	ン	181	録	フ		25	限	イ
125	敵	テ	154	布	フ	182	論	フ		26	紀	イ
126	適	テ	155	富	フ					27	基	イ
127	展	テ							28	貴	イ	

29	疑	ギ	ク	58	鈇	コ	ウ	87	宗	シ	ウ	116	蔵	ゾ	ウ
30	逆	ギ	ク	59	構	コ	ウ	88	衆	シ	ウ	117	俗	ゾ	ク
31	旧	キ	ウ	60	穀	コ	ク	89	就	シ	ウ	118	属	ゾ	ク
32	給	キ	ウ	61	混	コ	ン	90	述	シ	ウ	119	存	ゾ	ク
33	供	キ	ウ	62	査	コ	ゼ	91	純	ジ	ン	120	損	ゾ	ク
34	境	キ	ウ	63	差	コ	サ	92	処	ジ	ン	121	貸	ゾ	ク
35	勤	キ	ウ	64	再	コ	サ	93	諸	ジ	ン	122	忠	ゾ	ク
36	禁	キ	ウ	65	災	コ	イ	94	除	ジ	ン	123	著	ゾ	ク
37	訓	キ	ウ	66	妻	コ	イ	95	招	ジ	ン	124	賜	ゾ	ク
38	軍	キ	ウ	67	採	コ	イ	96	称	ジ	ン	125	貸	ゾ	ク
39	郡	キ	ウ	68	濟	コ	イ	97	証	ジ	ン	126	提	ゾ	ク
40	系	キ	ウ	69	財	コ	イ	98	条	ジ	ン	127	程	ゾ	ク
41	潔	キ	ウ	70	罪	コ	イ	99	職	ジ	ン	128	典	ゾ	ク
42	券	キ	ウ	71	策	コ	ク	100	仁	ジ	ン	129	党	ゾ	ク
43	兼	キ	ウ	72	蚕	コ	ク	101	推	ジ	ン	130	德	ゾ	ク
44	絹	キ	ウ	73	酸	コ	ク	102	是	ジ	ン	131	届	ゾ	ク
45	権	キ	ウ	74	支	コ	ク	103	制	ジ	ン	132	難	ゾ	ク
46	憲	キ	ウ	75	氏	コ	ク	104	聖	ジ	ン	133	式	ゾ	ク
47	險	キ	ウ	76	檢	コ	ク	105	誠	ジ	ン	134	認	ゾ	ク
48	減	キ	ウ	77	至	コ	ク	106	税	ジ	ン	135	納	ゾ	ク
49	蔽	キ	ウ	78	私	コ	ク	107	續	ジ	ン	136	能	ゾ	ク
50	已	キ	ウ	79	視	コ	ク	108	舌	ジ	ン	137	派	ゾ	ク
51	故	キ	ウ	80	詞	コ	ク	109	絶	ジ	ン	138	拜	ゾ	ク
52	個	キ	ウ	81	兒	コ	ク	110	宣	ジ	ン	139	犯	ゾ	ク
53	誤	キ	ウ	82	孝	コ	ク	111	專	ジ	ン	140	版	ゾ	ク
54	后	キ	ウ	83	辞	コ	ク	112	素	ジ	ン	141	否	ゾ	ク
55	効	キ	ウ	84	釈	コ	ク	113	創	ジ	ン	142	複	ゾ	ク
56	皇	キ	ウ	85	需	コ	ク	114	総	ジ	ン	143	仏	ゾ	ク
57	耕	キ	ウ	86	収	コ	ク	115	象	ジ	ン	144	畜	ゾ	ク

145	陛	ヘ	イ	
146	弁	ベ	ン	
147	補		ホ	
148	慕	ハ	ボ	カ
149	貿	ボ		ウ
150	暴	ボ		ウ
151	未		ミ	
152	盟	メ		イ
153	訳	ヤ		ク
154	預		ヨ	
155	欲	ヨ		ク
156	律	リ		ツ
157	率	リ		ツ
158	略	リ	ヤ	ク
159	臨	リ	ノ	ン

1年	40字
2年	110字
3年	170字
4年	220字
5年	182字
6年	159字
<hr/>	
計	881字

付録 4 実験学級 漢字の学習指導について

目 次

- 〔一〕 漢字学習指導上の一般的な注意事項……………90
 - 学年段階別指導の力点
 - (a) 1・2年生 (b) 3・4年生 (c) 5・6年生
- 〔二〕 漢字提出の方法と指導の機会……………92
 - (1) 漢字提出の方法
 - (2) 指導の機会
- 〔三〕 漢字学習指導の実際……………96
 - (1) 興味を重んじた学習例
 - (2) カードを中心とした練習
 - (3) 書取練習帳による練習
 - (4) そ の 他
 - (5) 治療学習としての形態
- 〔四〕 評価について…………… 101
 - (1) 態度・習慣
 - (2) 理解・技能

〔一〕 漢字学習指導上の一般的な注意事項

一般に漢字は、学習者の興味や必要に訴えて指導するときに、学習効果があがるものである。また、読み書きの機会を多くしてやるほど、習得率は高くなる。そのために、漢字の学習指導にあたっては、学習者の知能傾向や個人差に即して、その興味化や作業化がはからなければならない。

学年段階別指導の力点

(a) 1・2年生

この段階では、すべてが基本的な学習事項である。したがって、この段階ではあらゆる点で綿密・正確な指導が行われなければならないのであるが；特に指導上留意すべき点は、次のとおりである。

- 1) いちいちの漢字と事物（実物または絵など）とを結びつけて、漢字が表意文字であることを、初期の段階からよくのみこませる。
 - 2) 漢字とかなとは異なった体系下にあることを知らせて、その相互関係をも認識させる。
 - 3) 基本点画・筆順について正確な知識を持たせるように指導する。
 - 4) この段階の後期では、熟字の一目読みをも指導し、続いて1字ずつの分解読みもできるように指導する。
 - 5) 送りがなは、漢字とまとめて読み書きできるようにする。
- 以上のほか、用具の使い方や姿勢・態度なども適正であるように指導する。

(b) 3・4年生

この段階では、ようやく個人差が目だってくる。そのために能力別の指導が必要となる。指導の要点は、だいたい次のとおりである。

- 1) 漢字力の劣った児童には、特に治療的な指導をくふうする。
 - 2) 漢字を、ヘン・ツクリその他の部分に分けて、字形構成や系統の異同を知らせ、かつ字形の記憶を正確にする。
 - 3) 漢字の各種の音訓や同音異字について関心をもたせる。
 - 4) 学習準備のできている児童には、できるだけ多く読み書きの機会を作ってやる。
 - 5) 乱雑な字体をわざと書きたがる傾向が出てくるから、正しくきれいに書くように特に注意して指導する。
 - 6) 4年生では、以上のことを、辞書の初歩的な取扱いや、習字を行っているならば習字と関連づけて指導する。
- (c) 5・6年

前段階までに実施してきた漢字学習指導の方法を、いっそう程度を高めて行うほか、特に次のような点について努力する。

- 1) 個人差に応じて、さらに能率的な指導法を研究し、児童の漢字力をいっそう伸ばす。
- 2) 多くの漢字について分類比較を行い、知識をいっそう確かにさせる。
- 3) 辞書の使用に習熟させる。
- 4) 各種の熟字および同音異義字の使い方や書き分けに慣れさせる。
- 5) 国語教科書以外の各種の読み物を利用して、理解する漢字のわくをできるだけ広げさせる。また、それによって、どんな字が習得されたかを注意する。
- 6) 六書（りくしょ）の原理を利用し、学年相当の理解に応じた説明を行って効果をあげるようにくふうする。

〔二〕 漢字提出の方法と指導の機会

(1) 漢字提出の方法

学習漢字として配当されたものの中には、その学校の使用教科書の中に出てこないものがある。このような漢字をどのような方法で児童に提示するかが問題である。一般に児童が漢字に目をふれ習得する機会は、国語の教科書を通して行われるのが普通である。しかし、児童はそれ以外にも、生活環境の中で目にふれる人名・地名・広告・看板・掲示・新聞その他課外読み物からも多くの漢字を学びとっているのである。

そこで、漢字の提出方法として考えられる例を次に示すことにする。

(a) 使用教科書の文に配当漢字をはさみこむ。

※ 使用している国語教科書の文の中に配当漢字があてはまるような適当な語があったら漢字に書きかえる。

※ 国語教科書に適当な語がない場合、社会・算数・理科などの教科書の中で適当な語をさがしてあてはめる。

語はなるべく出度の高いものがよい。

※ 記入する場合は、欄外か、行間になるべく教科書と同じ大きさ、字形で示すことが望ましい。

※ 同一の課の中に多く提出して、児童の習得に負担が重すぎないように注意する。

(b) 教科書以外の文例による方法

※ 学習の補助資料として、次のようなプリントを児童に与える場合に、その文を利用し、配当漢字を提出する。

○ 児童の作品（日記・手紙・研究記録など）

○ 他の検定教科書の文、学年相応の読み物

※ 配当漢字をおりこむため語が不自然になったりむずかし

すぎるようにならないように注意すること。

※ 新出漢字であることを認知させるような、なんらかの方法を考える。

(文の末に新出漢字を掲げ、読みや意義の説明を加えておくとか、文中に傍線をつけ、新出文字であることを示すなど。)

(c) ことばの練習の機会に提示する。

(a)(b)は、文章を通して、その中で漢字を示そうとする方法であるが、これは、ことばだけを取りだして、漢字を示そうとするものである。

※ 話し合い(相談・児童会など)や研究発表・報告などの場を利用し、その中に配当漢字があてはまる語があった場合に、漢字を提示する。

※ 新聞・広告・掲示・看板・課外読み物・児童作品(研究記録・壁新聞)の中から適当な語を選んで、それを通して漢字を提示する。

※ 教師は、提出すべき新出漢字を熟知し、あらかじめ用意したカードなどによって、機会をのがさないで示すことが必要である。

※ 語(ことば)を通して文字を示す場合、(a)(b)の方法よりも字形の視覚的印象、意義の理解が、ふじゅうぶんになるおそれがあるので、多く目にふれ耳にしやすい語を選ぶことがたいせつである。

(d) 文字のみを抽出して提示する方法

文章やことばによらないで機械的に提示する方法である。

※ 同じヘン・ツクリの字をまとめて示す。

※ 類似の字形を集めて示す。

※ 漢字の字源的指導を介して行う。

※ 機械的に画数順に配当漢字をプリントしたりカードにし

たりして示す。

※ (a)(b)(c) のいずれの方法よりも児童の字義への理解がふじゅうぶんと思われるので、特に注意が必要である。

(2) 指導の機会

(a) 教科書やその他の文章を通して新出漢字を提示する場合。

○ 文章を与えて読ませる以前に、新出文字の読みやその他の説明をしてしまう。(板書して説明する。小黒板に書いておく。プリントによって新出字を説明する。)

○ 文章を読ませてから新出文字の説明をする。

※ 自由に読ませ、個別の質問に応じて読みを教える。

※ 自由読みをさせ、読めない文字をあとで質問させ、教師あるいは児童間でいっせいに解決していく。

※ 指名読みをし、誤読や読めない文字を解決していく。

※ 教師が最初、模範読みをし、新出文字の説明をしてから、児童に読ませる。

○ 児童が資料を使って解決していく。

※ 教師の与えた新出漢字の手引(読み・筆順・字義・熟語を書いたもの)のプリントを利用して理解していく。

※ 辞書を使って解決していく。

(練習)

文章を通して提示する場合は、第1時に読みの指導はもちろんなされなければならないが、字形・筆順などの書く練習は必ずしもやっってしまうなくてもよい。書くことの練習や読むことの練習でも文から抜きだして抽象したことばにしたの練習や熟語づくりなどは、その後の学習展開の随所に織りこんで断続的にくり返し行われなければならない。

(b) 熟語としてあるいは文字だけ抽出して新出漢字を提示する場合。

○ 話し合いや発表のときに出てきたことばを板書して漢字の指導をする。

※ そのことばを漢字で書ける児童に正しく教える。

※ 小黒板にあらかじめ書いておいて説明する。

※ その文字が使われている場合を集めてこさせる。

○ 広告・掲示・看板などの中から新出文字を集めて、指導する。(板書・プリント)

○ ポスター・掲示などを書くときに指導する。

○ 同じへんやツクリの文字と関係して指導する。

(練習)

熟語や文字だけを抽出して提示するのは、国語の学習時間に限らない。(たとえば、児童会するとき、図工科のポスターをかくときなど。)そのため、その文字の書き方、読み方などについて、くり返しを要する作業、それによって練習する時間が、必ずしも当然には与えられない。したがって、その文字は、国語の学習時間に文章を通して提出された新出漢字の中に含めて練習させる必要がある。(社会科や理科・算数の文の中の新出文字も同様。)漢字カードを使う場合にも、同じようにする。

(c) その他

※ 書く練習は、家庭作業としてさせる場合も考えられる。

(ワークブック)

※ 随時に、ノートの見学会や交換をして反省させる機会をつくる。

※ ノートに記入する場合、あるいは作文の時、当然使用されなければならない漢字は、できるだけ書くようにさせ、既習漢字は、カードを利用しやすいように、50音順にしておくとう便利である。

※ 日常生活の中で、目にふれる漢字を、町の文字集め、看板の字形集め、その他の方法によって進んで集めさせるよ

うにして、文字に関心をもつような機会をできるだけ多く作る。

※ 1日の学習生活の中に、5分～10分ぐらい漢字のくり返し練習（興味深く）の時間を設けることも考えられる。ただし、実験クラスのために特別に学習時間を1時間増したりするようなことはしない。

〔三〕 漢字学習指導の実際

一般に漢字の学習指導にあたって、まず指導者に要求されることは、当用漢字表・同音訓表・同字体表・同別表（教育漢字表）などについての正確な理解を持つことである。その上に立って、具体的な指導の場に応じ、児童に即して、いろいろと効果的な学習指導法が考えられなければならない。以下は、従来比較的に効果が多いと認められてきた漢字の学習指導例のうちの幾つかである。

(1) 興味を重んじた学習例

○ 背中黒板リレー 各列のいちばんうしろの児童に、書くべき文字を示し、次々に前の児童の背中に指で書かせていちばん前の児童にまで伝える。いちばん前の児童は、その文字を黒板にチョークで書く。正しく伝え、正しく書けたらよい。座席を順次ずらして交代する。

※ 遅筆をていねいにさせる。

※ 声を出したり、ふざけたりしないようにさせることが必要。

○ 漢字のたし算・ひき算 点線を補充して字形を完成する。へン・ツクリを補充したり、引き抜いたりして字形を認識する。

低学年では、なぞなぞ遊びもおもしろい。（一ローターなあに。「豆」。）

○ 筆順競争 児童を順に並べ、チョークで次々に筆順を追って

添加し、誤った場合は消して次のものが書く。早く完成したらよい。

以上のような興味を主とした学習を行う際には、次のような事項に注意することが望ましい。

※ 遊びだけに終らないよう、その時間の目標をはっきり決めておくこと。（たとえば、線・点の構成配置に主としたねらいを置くとか、文字と意義との結びつけをねらいとするとか、早くできるようにするとか……………。）

※ その字形のみに重点をおかず、文字の読み・字義・応用に注意して行う。

※ 長時間続けて行うよりも、断続的にくり返し行うことが効果的である。

(2) カードを中心とした練習

○ カードとり 教師か児童のうちだれかが読みあげた文字のカードを捨てる。低学年では、絵を見せてその文字を捨てる。（山の絵を見せて、「山」という文字を捨てる。）一つの絵の中からいくつかのことばをさがし、それにあたる漢字を捨てる。低学年では絵の説明をも兼ね、話し方の練習にもなる。源平に分れてカードを捨てる。

○ カード並べ 熟語をつくって並べる。反対語を並べる。似た文字をさがして並べる。

○ フラッシュカード カードを1枚ずつ瞬間的に見せて、読みとらせる。（語をひと目で読みとる練習。）

※ カードによる学習は、主として漢字の読みの練習が中心になる。

※ 児童の習得状況によって差をつけないと、優秀児のみの学習となるおそれがある。

※ 基礎的練習がじゅうぶんなされてから行うことが望ましい。

(3) 書取練習帳による練習

※ 従来の練習方法は、教科書の文字を見せて、これを機械的に数多く練習させるのが多かったが、効果的にくふうされなければならぬ。それには、

- その文字を全体として学習するような練習方法が望ましい。
(字形を書きとるだけでなく、意味・読み方・熟語・送りがな・類字など。)
- 練習は、1度に多くの文字を書くのでなく、断続的に続けて練習させるのが効果的である。(正しい字をよく見るように注意する。)
- 教師はノートの検閲や、テストによって児童の誤記の傾向や記憶の個人差を考え、練習の量・記憶の方法などをくふうする。
- 練習帳には、次のような新出漢字のプリントをはって、それを見て練習させるのも一方法である。(高学年では、ノートにそのような欄をつくって記入させるのもよい。)

プリントの例

番号	新出漢字	提出	読み	音訓	筆順	熟語	類字
1	運	ポスター	ウ はこ(ぶ)	ン	一車え	運動会 運送	連
2	顔	教科書	か	お	立ノ多頁		頭

- ノートには漢字のみでなく、その漢字を使って短文を書き、文の中で書きうるような練習もさせる。(送りがなにも注意して。)
- 視写だけでなく、聴写の練習もする。

(4) その他

- 部首別漢字練習 中学年から部首の一覧表を作成しておき、習った漢字を書きこんでいくのも一方法であり、高学年になって既習漢字を整理していくのも一方法である。
- 分解および字源的指導 既知の形に分解して記憶させる。これは、複雑な漢字の習得に便利である。(間を門と日、外を夕と覚えるなど。) 字源的指導は高学年において漢字の理解をいっそう深め、漢字の特質を明らかにするのに役だが、すべての児童および文字についてはむりがあり注意しなければならない。

(5) 治療学習としての形態

障害や誤りが積み重なっていくにつれて、漢字の習得も、累加的に困難さを増していくものであるから、治療のための学習がくふうされなければならない。

○ グループをつくる場合の類別基準

※ 発音(読みの不正確)や書写の基本的態度を直すためのグループ。

障害の原因が

{	身体的なものにあるもの
	経験や知的なものにあるもの
	用具の不備にあるもの
	情緒的なものにあるもの

※ 読めない漢字の種類や数によってわけるグループ。

全然読めない。

文の中では読めるが、単語では読めない。

1字では読めるが、熟語は読めない。および、その反対。

※ 書けない漢字の種類や数によって分けるグループ。

※ 書けるが、筆順が妥当でない。

※ 字形はいちおう整っているが乱雑である。

※ 単独の文字としては書けるが、文としては書けない。

○ それに応ずる練習の方法を考える。

※ 与える文字の種類と量とを考える。

（ 機械的練習
視覚的に印象づけのための作業
その他

※ 作業に応じたいろいろの補助資料を用意しておく。

○ グループの数と一つのグループの人数を考え、指導の重点をはっきりさせておく。

※ グループの数が多すぎて手がまわらなくならないよう。（一つのグループにかたよらないこと。）

※ グループは時に応じて編成し直す。

○ いっせい学習の中でも、治療的指導には、じゅうぶん配慮しなければならない。

〔四〕 評価について

(1) 態度・習慣

○ 読むこと

※ 興味をもっているか、どうか。（関心）

※ 進んで漢字を読もうとするか。（意欲）

※ 辞書を使って自分で読もうとするか。（興味意欲）

○ 書くこと

※ その文字に対しての関心。

※ 進んで書こうとするか。

※ ていねいに書こうとするか。

※ 姿勢や用具の扱いはよいか。

※ くふうして記憶しようとするか。

(2) 理解・技能

○ 読むこと

- ※ 発音が正しいか。
- ※ 字義がわかっているか。(1字, 熟語, 文の中で)
- ※ 早く読めるか。
- ※ 送りがなを理解しているか。

○ 書くこと

- ※ 点線が過不足していないか。
- ※ 字形全体のつりあいはいいか。(じょうずか, へたか。)
 - { 文字の構成部分の縮少, 拡大の割合。
 - { 平行線・対象形・曲線・点などのつりあい。
- ※ 筆順がよいか。
- ※ 1字でも, 熟語や文の中でも書けるか。
- ※ 文として書く場合, ひらがなや他の文字とのつりあいがとれているか。
- ※ 早く書けるか。
- ※ 字義を正しく理解して書けるか。(あて字)
- ※ 送りがなを正しく書けるか。

○ その他

- ※ 文字の部首・字源的理解はどうか。
- ※ 辞書を使えるか。
- ※ 作文, その他の表記はよいか。
- ※ ノートの使い方はよいか。

付録 5 漢字学習指導記録簿

昭和27年 月 日 (曜) 時 分 ~ 時 分 (分) 実施

(それにあたる欄に○印を記入する)

この時間に使用した漢字		
○新出・読替・無印既出		
提出語		
提出の方法	教科書に出てくるもの	
	教科書中の語にあてはめたもの	
	教科書以外の文例によったもの	
	ことばの練習の機会に示したもの	
	その他	
備考		
指導の目標	読 み	
	書 き	
	読み書き双方	
	備考	
指導の方法	わかるように教師が指導した	
	板書して字形を認識させた	
	ノート・ワークブックで練習させた	
	音読で読みを確かめさせた	
	熟語・単文を作らせた	
	辞書で字形構成を調べさせた	
	似た字形・まちがいがやすい字形を比較研究させた	
	テストをした	
その他		
備考		

教	教科書	第 課
材	その他	
指導の反省	<ol style="list-style-type: none"> 1 指導方法は効果的だったか。 2 指導の目標は適当だったか。 時間は何分ぐらいとったか。 時間配分はじゅうぶんだったか。 3 指導方法やそれに用いた材料は適当だったか。 4 特に効果的だった指導の方法・予期したとは異なった結果を生んだ指導の方法・その他について。 	
学習活動について	<ol style="list-style-type: none"> 1 児童は説明を理解したか。どんなぐあいに興味を示したか。 2 読み・書き・意味・用法・字源などについて児童が表現した感想・意見・疑問など。 3 意味用法について示した誤解。 4 使いたがった漢字・質問の多い漢字。 	

通信欄 (通知・意見・質問などがあったら、ここへお書きください。)

昭和28年度

指導した漢字	前学年までにすでに学んでいる読み方	日付	時間						
	この学年になってから学んだ読み方								
	この月になってはじめて学んだ読み方	提出語句							
提出の機会	国語の教科書に出てきた								
	国語教科書の語にあてはめた								
	他の教科書に出てきた (学科名)								
	プリント・掲示類・児童の作品などに出た								
	話合いの機会に出た								
	教師の話または放送聴取のときに出た								
	その他								
児童の学習活動	読む								
	字形を書く								
	筆順を書く								
	似た形の字との比較								
	意味の上で関係のある字との比較								
	熟語・短文づくり								
	その他, 文字集め・カードづくりなど								
	用具	ノート							
		ワークブック							
		カード							
辞書・参考書・漢字表									
黒板									
	その他, ヒゴ・画用紙・石盤など								
教師の指導	口頭でよみを教えた								
	口頭で意味を教えた								
	板書して字形を示した								
	板書してよみを示した								
	字源あるいは構成部分から説明した								
	筆順を教えた								
	カードを用いて (よみ・字形) を説明した								
その他									
学習および指導に費したおよその時間									
(単位 分)		分	分	分	分	分			

月					(備考)
漢字學習指導記錄簿					
(第 号)					
学 校 名					
教 官 名					
年 名					
	分	分	分	分	

漢字学習指導記録簿 (第 号)

昭和 29 年度

月	日付					
指導した漢字	前学年までに学んでいる読み方	提出語句					
(1字記入)							
	この学年になってから学んだ読み方						
指導の機会	①国語教科書に出てきた	1					
	②他の教科書に出てきた(教科名)	2					
	③教科書の語にあてはめた	3					
	④その他	4					
児童の学習活動	①読む練習をした	5					
	②書く練習をした	6					
	③他の字との比較をした	7					
	④熟語・単文作りをした	8					
	⑤その他	9					
教師の指導	①口頭で指導した	10					
	②板書して指導した	11					
	③ワークブックなどを用いて指導した	12					
	④その他	13					
(備考)							
(学校・学年・教師名)							

漢字学習指導記録簿 (第1号)

昭和29年度

記入例

5月	日付	10	15			
指導した漢字	前学年までに学んでいる読み方	提出語句	木を植える	植木			
(1字記入)	うえる						
植	この学年になってから学んだ読み方						
	シヨク						
指導の機会	①国語教科書に出てきた	1	○				
	②他の教科書に出てきた(教科名)	2					
	③教科書の語にあてはめた	3					
	④その他	4		○			
児童の学習活動	①読む練習をした	5	○				
	②書く練習をした	6		○			
	③他の字との比較をした	7					
	④熟語・短文作りをした	8					
	⑤その他	9					
教師の指導	①口頭で指導した	10	○				
	②板書して指導した	11		○			
	③ワークブックなどを用いて指導した	12					
	④その他	13					

(備考)

15日— 学校林のことについて話し合ったときに出た。
筆順指導。

(学校・学年・教師名) 刈谷小学校 4年

服部 秀雄

漢字学習指導記録簿について (昭和29年度)

(1) 記録簿を文部省に送る方法

「漢字学習指導記録簿」は、毎月記入して、翌月の10日までに文部省調査局国語課あてに送ってください。その際、次のような送り状をそえてください。(送り状書式略)

(2) 記録簿に記入して報告すべき漢字

記録簿は、「学習漢字学年別配当試案」のその学年の配当字のなかで、その月に「指導した漢字」1字につき各1枚ずつ使用してください。「指導した漢字」というのは、教師が意図的に「読み」「書き」その他について、いっせい指導を行った漢字をさします。単に教科書に出てきただけのようなのは、含みません。

なお、実際に指導した漢字であっても、「学習漢字学年別配当試案」のその学年の欄にない字は、報告するには及びません。

(3) 「提出語句」の欄の記入について

漢字だけでは読み方のわからないものには、ふりがなをつけてください。

(4) 「指導の機会」「児童の学習活動」「教師の指導」の欄の記入について

(ア) それにあたる欄に○印を記入してください。

(イ) 「指導の機会」の2・3項にあたる欄には、○印の代りに下記のような略号で記入してください。

社会科→社，算教科→算，理科→理

体育科→体，図工科→図，音楽科→音

家庭科→家など

(ウ) 「その他」の項にあたる欄に○印をつけた場合には、その内容を備考欄に簡単に注記してください。

(5) 「指導の機会」の欄の「その他」の項にあてはまる場合のおもなもの。

(ア) 他の検定国語教科書の文や校外授業の解説のプリント，新聞広告・看板・掲示・児童の作文や研究記録，そのほか学年相応の読み物などで学習の補助資料として用いたものに，その漢字が出てきた場合。

(イ) 学級全体の相談・討論・反省会などの機会に出てきたことばに結びつけて，その漢字を指導した場合。

(ウ) 教師の話または放送聴取などで問題となった漢字について指導した場合。

(6) 「教師の指導」の欄の「口頭で指導した」の項にあてはまる場合のおもなもの。

(ア) 模範読みをして教えた場合。

(イ) 児童に自由読みをさせたのち，わからない字について質問したのに対して，口頭で読みを教えた場合。

(ウ) 板書してある字の読みを口頭で教えた場合。

(エ) 指名して児童に読ませ，読めない字を教師が口頭で教えた場合。

(オ) 読みや字形ばかりでなく，意味をも口頭で教えた場合。

(7) 下記のような場合には，「備考」欄に簡単にその旨を注記してください。

(ア) 文字集め，カード作り，その他特別な作業に訴えたり，特別な用具や方法を用いて指導した場合。

(イ) 字源またはヘン・ツクリのような漢字の構成部分から説明した場合。

(ウ) 筆順を教えた場合。

(エ) 同一文字につき5分以上続けて指導した場合。授業時間中に簡単なテストをしたとき。

(オ) 児童が特に興味を示したとき，困難を訴えたとき，その他指

導上特に気がついた問題があったとき。

学習指導記録簿の形式にあてはまらない報告があるとき、および備考欄に書ききれないときは、別紙に書いて、それをそえて送ってください。

(注 27年度・28年度記録簿の記入法の説明は、掲載を省略。)